O-2

労働者の雇用問題と社会福祉政策の拡充に関する試論 - 貧困との関わりの中で -

国際福祉医療カレッジ　田中秀和

【目的】

今日の日本では，「一億総中流」時代の終焉が叫ばれ，「格差拡大」や「貧困の再発見」等の新たな言説が叫ばれている．このような状況の中で，労働者の雇用問題と深い関わりをもつ用語として「フリーター」，「ニート」，「ワーキングプア」，「労働者派遣」等の言葉が世間に浸透し，これらの用語は誰もが知るものとなっている．

これらの用語は定義がはっきりしない面をもち，論者によって様々な考え方が氾濫している．本研究では，上記のような労働者が発生するのは，その個人に原因があるのではなく，社会福祉政策の不備にあるとの立場にたち，上記労働者の多くが抱えている貧困の解消と，誤った言説の抑止を目指す新たな方法として福祉教育の充実を提言した．

【方法】

研究方法は，フリーター，ニート，ワーキングプア，派遣労働，貧困等に関する文献を収集し，分析・評価を行い考察するものである．

【結果】

上記のような労働者の雇用問題が発生している背景には，非正規雇用労働者の急増があることが明らかになった（非正社員数：1173 万人［1998 年］→1726 万人[2007 年]）．

また，非正規雇用労働者が急増した背景には，2 つの大きな要因が働いていることが判明した．その 1 つ目の要因は，1985(昭和 60)年に成立した「労働者派遣法」である．これは，「職業安定法」，「労働基準法」（ともに 1947 年制定)が禁止していた「中間搾取」を通訳等の専門性が確立されている職業に限り解禁したことに始まる．

要因の 2 つ目に挙げられるのは，1995(平成 7)年に日経連（日本経営者団体連盟）が「新時代の日本的経営」構想を発表し，その中で「多様な働き方」を提言したことである．これは，労働者を 3 つのグループに分けようとしたものである．構想の第 1 グループは，「長期蓄積能力活用型」である．これは，企業を支える人材の中でエリートを選び，それらの人々に長期で安定した雇用を保証するグループである．このグループには，管理職や総合職が想定されている．また第 2 グループは，「高度専門能力活用型」である．これは，高度な専門性をもっている職種の人材がいくつもの職場を渡り歩くことをイメージしたグループである．このグループには，企画・研究などの専門職が想定されている．そして第 3 グループは，「雇用柔軟型」である．これは，産業構造や景気の動向に敏感に経営者が対応できるように，パート・アルバイト・契約社員等を想定して発表されたものである．

上記に挙げた 2 つの大きな要因は，社会のなかに確実に浸透し，非正規雇用労働者の急増に寄与することになった．

非正規雇用労働者は，これまで述べてきたような背景があり，急増したものであるから，その責任は個人に帰するものではない．しかし，非正規雇用労働者に対する社会からの眼差しは「貧困」＝「自己責任」とする風潮が強い(田中 2007)．

非正規雇用労働者は，一般的に収入が低く貧困状態に陥る可能性が正規雇用労働者よりも高くなる．こうしたなか，湯浅(2008)は，「溜め」の理論を発表している．これは本研究を進める上で貴重なものである．湯浅は，「人間は失業等の厳しい状況に追い込まれても『溜め』があるから生きていける」との考えを示している．ここでの「溜め」とは，有形無形の様々なものがあるが，例えば貯金，頼れる親族・友人，自分を大切に思えることなどであり，社会福祉学の専門用語では，「社会資源」に当たるものと思われる．

湯浅(2008)は上記理論の中で，貧困状態にある多くの人々は，教育，企業福祉，家族福祉，公的福祉，自己から排除されているとする「五重の排除」状態にあるという考えも示し，「非正規雇用労働者や貧困に苦しむもの＝自己責任」とする考え方に警笛を鳴らしている．

このような状況の中で，非正規雇用労働者（フリーター）である赤木(2008)は，現在の自分の置かれている状況に絶望感を持ち，戦争が起きて社会が混乱したほうがまだ望みがあるとする衝撃的な論文を発表した．このような論文が発表された背景には，これまで明らかにしてきたような社会の変化があるのにも関わらず，非正規雇用労働者に対する政策が十分に行われていないからである．

【考察】

これまで述べてきたような状況の中で，社会福祉学が行える役割のひとつは福祉教育の充実である．この課題を達成するために，社会福祉士をはじめとするソーシャルワーカーは今日の日本社会の現状を正確に捉え，非正規雇用労働者や貧困者が自己責任のみでそのような状態になったのではないという認識をもつ必要がある．

また，2009(平成 21)年度から社会福祉士養成カリキュラムが改められ，新たに「就労支援サービス」が必修科目として教育されることになった．同科目のテキストの中には，本研究で登場した湯浅(2008)の「溜めの理論」も紹介されている．将来，社会福祉士となる人がこのような科目を履修することによって「溜め」の考え方を身に付け，実践に生かすことが期待される．

【文献】

田中秀和：格差社会と社会福祉士ー若年労働との関連を中心にー，新潟医療福祉学会誌 7(1)p38-42, 2007.

湯浅誠：反貧困ー「すべり台社会」からの脱出ー，岩波新書．東京．P83, 59-69, 2008.

赤木智弘：「丸山眞男」をひっぱたきたいー31 歳フリーター．希望は戦争ー．, 文春新書編集部編　論争　若者論. 文春新書．東京. pp10-24, 2008.